

2019. 11. 24 第4主日礼拝

ヨハネ 3:16 「神は世を愛された」

聖書

16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

はじめに

ヨハネ 3:16 は聖書の中でも有名なことばで、キリスト教の本質が語られています。その本質とは何か、本日午後の久米小百合クリスマスコンサートにも通じるものとして紹介したいと思います。

1. 神は愛です

私の子どもの頃の遊び場は神社でした。毎日のように境内で遊んでいました。また家には仏壇があり、小さい頃は祖母の隣に座り読経を聞いて育ちました。神や仏に対して親しみを持って育ったように思います。とはいっても、その実体や本質に迫るほどの求めはなく、やがて特別な時（正月、盆、祭り、葬儀）以外は生活の場から神仏への思いも消えて行きました。私は大学生の時に聖書に触れたのですが、聖書に記されている神という存在が、幼少期に与えられた神仏への思いを蘇らせたのか、真剣にその実体を求めるようになりました。そこで得た答えが、神さまは人と交わる方であり、人に積極的に語りかける方であり、人を導く方でした。このような神さまをその時まで知りませんでした。特に印象深く残った神さまのイメージが「神は愛です」というものです。神さまとは何かを深く考えたことのなかった者に、「神は愛です」と迫るものがあったのです。

今日初めて「神は愛です」ということばを聞かれた方はいるでしょうか。これが聖書の神さまを知る出発点で、服を着るときの最初のボタンのように、ここで掛け違うとそのあとずっと掛け違ったまま進むことになります。ボタ

ンの掛け違いが起こってしまいますと、この世の不条理や理解できないことに対して、「神はなぜ…」と神さまに不満を持ち、「神が愛であるはずがない」と神さまを悪者にしてしまいます。もしこうなっていたら、少し立ち止まってみましょう。

2. 神の愛は世に向けられた

神は愛です。その愛はどこに向けられたのかと言うと、「世」に向けられたのです。「神は世を愛された」のです。愛の対象である「世」を二種類に分けて考えることができます。一つは「私」という個人です。神さまは私を愛してくださったのです。愛さまの愛は時に排他的になります。そこには、他の者の侵入を許さず、その人だけを見続ける独占的な強さがあります。神さまの愛は「私」という一個人に強く向けられていて、いつも私のことを心配し、気にかけて、大丈夫かと声をかけ、間違った時は戒め正しい方向に導いてくださるのです。「神は世を愛された」というとき、「世」に「自分の名前」を入れて受け取って頂きたいのです。

もう一つの「世」は私だけでなくすべての人が含まれるこの社会全体です。そこには人種の違いや国家の違い、言語の違いなど様々な違いがあっても、全部を含めて「神は世を愛された」のです。すべての人間が神さまに愛されていて、神さまの愛から漏れる人は一人もいないということです。この神さまの愛の対象の広さに時々私たちは戸惑います。なぜなら、自分には受け入れ難い人が含まれているからです。私たちは自分にとって受け入れ難い人を排除したいと思いかもしれませんが、神さまは違います。神さまはその人も愛しておられます。この神さまの愛の寛大さ、寛容さに人はどうしても納得ができないかもしれません。「なぜ、こんな人が神さまに愛されていると言えるのか」と疑問を持つとき、それはあなたが裁判官の側に立って人を裁いているからです。でも、自分が裁かれる側に立つ人間だとしたらどうでしょうか。裁判官から見た世界とは180度真逆の世界が見えるはずで。そして、そこでもし「わたしはあなたを責めない。あなたを赦します」という声を聞いたなら、どう思うでしょうか。おそらく赦しのことばに驚き、涙し、感謝

するのではないのでしょうか。どんな人をも赦す神さまの大きな愛は、自分を裁かれる側に立たせたときにだけ見えるものなのです。被告人席に立った時、そのとき「神は世を愛された」ことの意味がわかるのです。

3. ひとり子を与えるほどに

人は神さまによって造られた作品です。神さまの手の中で生きるように造られたのですが、自分の好きなように生きたいと言って神さまの手を振り払ったのが人間の罪の始まりです。神さまは自分から離れていく人の姿を見て悲しまれました。戻ってくることを願い何度も声をかけますが、声をかければかけるほど人は離れて行きます。神さまに背を向けて生きることを罪というのですが、人が罪から立ち返るために神さまはメッセージを語ります。しかし届かないのです。人が聞く耳を持っていないからです。神さまは聞く耳を持たない人間の前に、ご自分のひとり子イエス・キリストを遣わし、キリストの生涯を通してご自分の下に引き戻そうとされたのです。それを聖書は「救い」と言います。神さまから離れてしまった人間の罪を愛するご自分のひとり子であるキリストに負わせ、罪の刑罰である十字架を彼に背負わせたのです。十字架には、たった一人の愛するわが子に人の罪を背負わせる神の痛みが隠されています。

神はなぜそこまでされるのでしょうか。それは、罪を持ったままの人間が行き着く先は「滅び」だからです。神さまは愛する者が滅びの世界に行っても欲しくないとして強く願っておられ、滅びから免れる道を用意してくださいました。キリストを信じる信仰によって、赦されて生きる道があることを教えてくださいました。その道を教会の交わりの中で見出していきたいと願います。また今日午後のコンサートを通して、救いの道に導かれる方が起こされるように願っています。

結び

神さまは世を愛されました。その愛はすべての人に向けられています。それを物語るエピソードがありますので、紹介して締め括ります。

「33 個めの石」というタイトルの本があります。この本には、アメリカの大学で起きた銃乱射事件のことが書いてあります。2007 年 4 月 16 日に、アメリカのバージニア工科大学で、学生による銃乱射事件が起き、32 人の学生・教員が殺されました。そして、乱射した 23 歳の学生は自殺しました。本当に悲惨な事件です。この事件の次の週に、被害者の追悼集会在大学で行われました。大学側は、犠牲者の数に合わせて、サッカーボール半分ほどの花崗岩の石を 32 個用意し、その石は広場の芝生の上に半円形に置かれ、それぞれの石には花が添えられました。犯人によって殺されたのは 32 人です。追悼集会の前日までは、置かれた石は 32 個でしたが、当日はそれが 33 個になっていました。自殺した犯人の分も誰かが加えたのです。あとで名乗り出たので分かったのですが、33 個目の石を置いたのは、バージニア工科大学四年生のカタリンさんでした。彼女は、犯人のためにも石を置いたことについて、「犯人の家族も、被害者の家族たちと同じくらい深く苦しんでいるのです。私たちは 33 人の人間を失ったのです」とコメントしています。この 33 個目の石は、その後誰かによって取り去られ、また誰か別な人が新しく石を置くということが繰り返されたそうです。

神さまはこの 33 個目の石が失われるたびに人の手を通してその場所に置いてくださったのではないかと思います。「わたしはこの人のためにも十字架で死んだのです」というメッセージと共に 33 個目の石が置かれたのではないのでしょうか。神さまの愛は私たちの愛の範囲を超えています。それゆえに理解できない面を持っています。しかし、その無限の愛で今ここにいる一人一人を包んで下さっていることを知ってください。私たちは乱射事件の犯人のような犯罪者ではないかもしれませんが、しかし、神さまの手から離れた罪人であることに変わりはありません。そのことに気づいた人は神さまの手の中に戻るチャンスが与えられています。

神さまがご自分のひとり子を与えるほどに世を愛しておられることを今日受け止めてこの場と立ち上がることができますようにお祈りします。